

令和5年度「地域包括ケア実習Ⅰ（母子の家庭訪問）」を紹介 します。

大学院実践者養成コースでは、公衆衛生看護学と助産学の学生が合同で学ぶ地域包括ケア実習Ⅰを行っています。この授業では、地域で生活する母子とその家族を対象に1年間を通して、対象者の健康状態や家族状況などを把握し、継続支援の意義や必要性について学びます。

4月に入学した実践者養成コースの1年生は、助産学の学生が8月から始まった助産学実習でお産の時から受け持たせていただいた母子を1年間継続して受け持ちます。入院中から産後1か月健診までは助産学生が中心となり、その後公衆衛生看護学又は助産学の学生がペアとなって継続的に関わりを持つことになります。

今回は、産後2か月頃までに保健師又は助産師が行う家庭訪問（こんにちは赤ちゃん訪問）に同行させていただきました。母子の家庭訪問では、「退院後のお母様と赤ちゃんが生活している場を実際に見て、母親の健康状態や児の発育発達の様子を学ぶことができた」という学生の意見がありました。赤ちゃんの発育の様子やお母様の身体の回復状況など、家庭での子育ての様子を拝見することで、貴重な学びの機会となりました。

次回は、地域の保健センターで実施している「4か月児相談」でお会いできることを楽しみにしております。 【担当教員：木戸久美子、植村裕子、石原留美、野口純子（文責）】



（助産師さんとの同行訪問で、赤ちゃんの発育・発達について観察している様子を見学）